［研究ノート］

前方後円墳と横穴墓の近接に関する予察

鶴見　諒平

要　旨

福島県内の横穴墓では、その近くに前方後円墳が存在している事例がある。現在のところ、会津地方２例、中通り地方２例、浜通り地方５例を確認している。

これらの事例の内、前方後円墳と横穴墓の築造時期の前後関係が明らかなものでは、古墳の築造が先行し、横穴墓の築造が後続する。先行研究から、大型古墳と中小規模古墳が近接する事例の一部では、中小規模古墳が意図的に大型古墳の近くを墓域に選んだと考えられる。そのため、前方後円墳と横穴墓が近接する場合でも、意図的に前方後円墳の近くを選んで横穴墓を構築した可能性を予察した。

キーワード

横穴墓　前方後円墳　立地　古墳時代

１　はじめに

福島県では、古墳時代後期・終末期に多くの横穴墓が築造され、太平洋に面した浜通り地方では特に多くの横穴墓が確認されている。横穴墓の分布を見ていくと、横穴墓が掘削された斜面の上部やその前面などの近接した場所に前方後円墳が存在していることがある。本稿はその事例の整理を目的とした。

２　研究史

東北地方南部における横穴墓の分布については、後期前半までの群集墳とは異なる場所に営まれるのが一般的であること、陸奥国成立期の官衙関連と推定される遺跡の周辺に集中する傾向があることが言及されている（菊地2005）。官衙関連遺跡などの特定の性格の遺跡と横穴墓の分布を結び付けて理解されている研究である。

遺跡だけではなく、横穴墓群に接して確認されている遺構と横穴墓を結び付けて捉える研究もある。

横穴墓が立地する丘陵や台地上には、後背施設と見られる、埋葬施設を持たない墳丘が確認されている事例が見つかっている。その事例について検討した横須賀は、類例が九州地方と山陰地方に見られるが、山陰地方の後背施設と横穴墓の位置関係が福島県内の事例に類似していること、山陰地方の事例が福島県内近い時期の６世紀後葉～７世紀初頭に見られることから、山陰地方からの影響を想定している（横須賀2000）。その性格としては、「墓域の明示」、「政治的意味の表象」、「儀礼の場、墓碑的構築物」などを想定している。

福島はこのような後背施設を「土壇」と表現している（福島2019）。土壇は「大伴の遠つ神祖の奥津城はしるく標して人の知るべく」という歌にある「標」に類するものであると言及している。「土壇」に自分たちの先祖の墓がどこにあるかはっきりとわかるような目印としての機能を想定していて、横須賀同様に墓域を明示するものとして言及している。

また、福島は、埋葬施設をもたない「土壇」だけではなく、須賀川市大仏横穴墓群の前面と背後に古墳が造られていることを挙げ、古墳自体にも「土壇」と同じように墓の目印としての役割を想定している。近接した範囲に存在している古墳と横穴墓を結びつけ、古墳に横穴墓の目印としての機能を想定していることは注目できる。

大仏横穴墓群のように、古墳と横穴墓が近接して存在する場合、その築造時期に関連が見られることから、それらを築造した集団同士の関係を想定する論考もある。他県の事例となるが、茨城県ひたちなか市十五郎穴横穴墓群と笠谷古墳群・虎塚古墳を見てみたい。

笠谷古墳群・虎塚古墳は、那珂川北岸にある前方後円墳で、河口から４㎞ほど上流に位置している。笠谷古墳群では、６世紀後半の前方後円墳である笠谷６号墳が確認されている。そこから、北に500ｍほど離れた場所には虎塚古墳が立地している。笠谷６号墳は、同時期において周辺に前方後円墳がみられないことから首長墓と推定されている。また、虎塚古墳も那珂川北岸においては、古墳時代後期末で

最大規模の前方後円墳であり、後期末におけるその周辺地域の首長墓と考えられている。

この笠谷古墳群・虎塚古墳が立地する台地の斜面下部では、十五郎穴横穴墓群が確認されている。十五郎穴横穴墓群の造営開始時期は、出土遺物や横穴墓の型式学的な分析から、近接する虎塚古墳の追葬の時期と同時期の７世紀前半と見られている。そのため、十五郎穴横穴墓群の造営集団は、有力首長墓である虎塚古墳と密接な関係を持ち、新たな墓制として横穴墓を採用したことが想定されている（稲田2016）。丘陵や台地などの上部にある前方後円墳に接して、その下部斜面に横穴墓が近接して存在する事例について、その造営集団の関係を想定する視点は、近接する横穴墓と前方後円墳の関係を考える上で重要である。

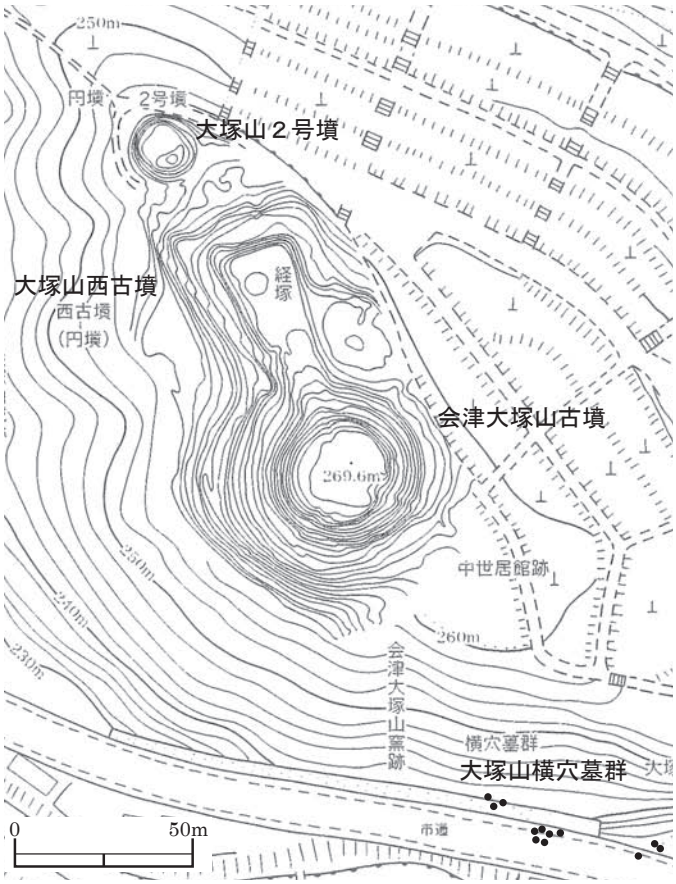
以上のように、横穴墓・古墳の分布や立地から両者の関係やその背景などが検討されていることがわかる。この中で特に注目されるのは、虎塚古墳と十五郎穴横穴墓群のように、前方後円墳が立地する場所の直下に横穴墓が存在している事例である。前方後円墳と横穴墓の立地関係が同じものは福島県でも確認することができる。そのような事例は個別には取り上げられてはいるが、まだ整理の途上にある。本稿では、そのような前方後円墳と横穴墓が近接する事例を整理し、それぞれの事例について、前方後円墳・横穴墓の年代を確認していく。

前方後円墳と横穴墓の位置関係を見ると、虎塚古墳と十五郎穴横穴墓のように横穴墓がある斜面上部に前方後円墳が存在する事例が多い。それに加え、横穴墓が掘削された斜面の前面に前方後円墳が立地している事例もある。本稿では、その両方の事例について集成した。

なお、横穴墓の名称については、横穴墓群、横穴古墳群など記載を統一せず、遺跡地図や報告書で使用されている名称をそのまま使用している。

３　会津の事例

会津地方は、古墳時代前期を中心に多くの前方後円墳が築造されたが、中期・後期以降と考えられる古墳は少ない。横穴墓の数は福島県内では最も少なく、現在までに会津若松市会津大塚山横穴墓群、同駒板新田横穴墓群、喜多方市山崎横穴古墳群、会津坂下町鬼渡古墳群、会津美里町向山横穴墓群など数えるほどしか確認されていない。これらの横穴墓群の内、大塚山横穴墓群と山崎横穴古墳群の２か所で前方後円墳が近接して築造されている。



第１図　大塚山横穴墓群と会津大塚山古墳

①会津大塚山古墳と大塚山横穴墓群

会津大塚山古墳は会津若松市街地の北東にある大塚山と呼ばれる丘陵上にある。古墳は全長114ｍの前方後円墳で、２基の埋葬施設が確認されている（会津若松史出版委員会1964、会津大塚山古墳測量調査団1989、福島県立博物館1994）。北棺からは捩文鏡・紡錘車・管玉・刀子など、南棺からは三角縁神獣鏡･変形四獣鏡･三葉環頭大刀・鉄剣・鉄鏃・銅鏃・鉄製農工具・玉類などが出土し、おおよそ４世紀中頃の築造と考えられている。

その周囲では２基の円墳も確認されている。前方部北側にある大塚山２号墳は、埋葬施設の発掘調査が行われ、木炭槨を持つことが判明している（伊藤1978）。大刀の一部、鉄鏃が残存していて、鉄鏃は全て長頸のものであることか

ら築造時期は少なくとも中期以降に位置づけられる。

前方部西側にある１基は、大塚山西古墳と呼ばれ、箱形石棺が見つかっている（会津若松史出版委員会1967）。遺物は出土していないため、時期は明確ではない。会津地方では、５～６世紀代の箱形石棺が確認されているが、古墳時代前期にさかのぼる箱形石棺の例が見られないことから、西古墳は中期以降に築造されたと推定される。

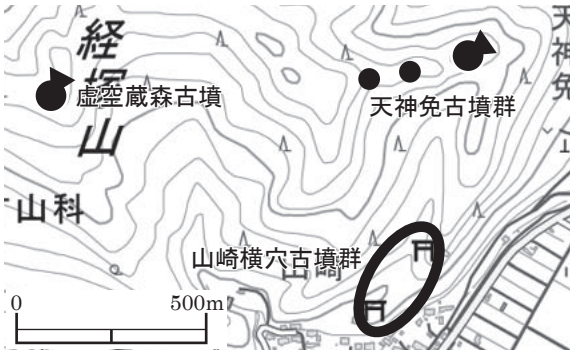
一方で、大塚山横穴墓群は、会津大塚山古墳から南東に50ｍほど離れた斜面で見つかった（小滝1979）。12基の横穴墓が確認されているが、そのうちの９基は発掘調査後の市道建設のため削平されていて現存しない。10基の横穴墓の調査が行われ、２号墓から大刀・刀子・玉類、５号墓から大刀、６号墓から刀子・鉄鏃、９号墓から大刀が出土している。その内９号墓から出土した大刀には銀による象嵌があることが確認されている（穴沢ほか2010）。大刀はＴＫ43型式期～飛鳥Ⅰ式期のものと見られ、横穴墓の造営は６世紀後半～７世紀代にかけて行われたものと推定される。

以上のように、会津大塚山古墳の周囲では、大塚山２号墳、大塚山西古墳と古墳時代中期～後期に古墳が築造され、少し時期をあけて後期～終末期頃に大塚山横穴墓群が築造されている。

②虚空蔵森古墳・天神免古墳群と山崎横穴古墳群

虚空蔵森古墳と天神免古墳群は喜多方市の南西部、阿賀川北岸にある丘陵上に立地している。経塚山と呼ばれる丘陵の山頂には、全長46ｍの前方後円墳である虚空蔵森古墳が存在している（喜多方市1995）。発掘調査などが行われていないため、詳細な年代は不明だが、前期古墳と推定されている。

虚空蔵森古墳から西に１㎞程離れた場所には、３基の古墳が確認されている天神免古墳群がある（喜多方市1995）。その内の１基が全長35ｍ程と見られる天神免古墳である。時期は前期または中期と推定されているが、詳細は判明していない。また、虚空蔵森古墳との前後関係も不明である。



第２図　山崎横穴古墳群とその周辺

これらの古墳が立地する丘陵の南東斜面に山崎横穴古墳群が存在している。明治期には開口し、馬具・銅鏡・勾玉など多くの副葬品が出土したことが記録に残されている（穴沢1976）。横穴墓は現在49基が確認されていて、そのうち数基の発掘調査が行われ、１号墓からは鉄鏃、刀子、ガラス小玉、須恵器、９号墓から大刀２振、46号墓から小札が出土している（山中2002）。

小札は６世紀後葉（TK43型式期）、鉄鏃はTK209型式期以降、大刀は７世紀初頭～中葉頃のものと評価された（横須賀2011）。以上のことから、山崎横穴古墳群は６世紀後半以降に造営が開始され、７世紀代まで造営が継続したと考えられる。

会津地方では後期以降の古墳が現状ではほとんど確認されていないことから、虚空蔵森古墳や天神免古墳群は前期または中期の築造である可能性は高いが、山崎横穴古墳群との前後関係は現状では確定していない。

４　中通りの事例

中通り地方では、中部から南部にかけての地域を中心に横穴墓が確認されている。横穴墓と前方後円墳が近接する事例は、大仏横穴墓群と笊内古墳群の２例が確認できる。

①大仏古墳群と大仏横穴墓群

須賀川市大仏古墳群は阿武隈川に面した丘陵とその前面の河岸段丘上に展開している（須賀川市1974）。古墳群はいくつかのグループに分かれていて、丘陵上には帆立貝形古墳と見られる古墳１基と円墳８基が存在している。この９基の内、１号墳と呼ばれる円墳の確認調査が行われている。発掘調査では埋葬施設は確認できず、遺物も出土していない。

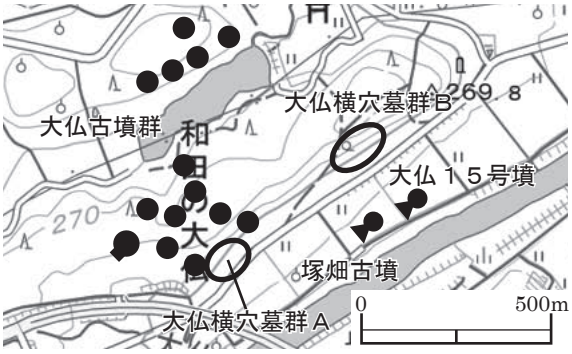
報文には丘陵上の古墳の内のいくつかは横穴式石室を持つと記載されているが、詳細は不明である。これらの古墳は７世紀代の築造と推定されている。また、大仏古墳群では帆立貝形とみられる古墳を含んでいるが、それについても時期は明確ではない。

この丘陵の前面に広がる河岸段丘上には２基の前方後円墳が存在していた。古墳は北側から順に大仏15号墳、塚畑古墳と呼ばれる（須賀川市1974、須賀川市教育委員会1974）。

大仏15号墳は横穴式石室が確認され、鉄鏃・耳環・金銅装の飾金具・玉類・土師器・須恵器等が出土し、墳丘からは埴輪片も出土している（須賀川市1974）。横穴式石室の平面形態などの特徴は、MT85型式期に比定される茨城県東海村舟塚１号墳の石室との類似が指摘されている（草野2015）。この舟塚１号墳からは、上半身と下半身を別に成形する分離成形の技法で製作された人物埴輪が出土している。分離成形の技法は茨城県久慈川以南から霞ヶ浦北岸地域を中心に分布し、そのような人物埴輪は６世紀後半の事例が多い。これらのことから、大仏15号墳も６世紀中頃～後半の築造と考えられる。

塚畑古墳は大仏15号墳に後続する古墳と評価され、周溝内から多量の人物埴輪が出土している。その中には分離成形によって製作された人物埴輪が含まれ、６世紀後半と比定されている（阿部1999）。

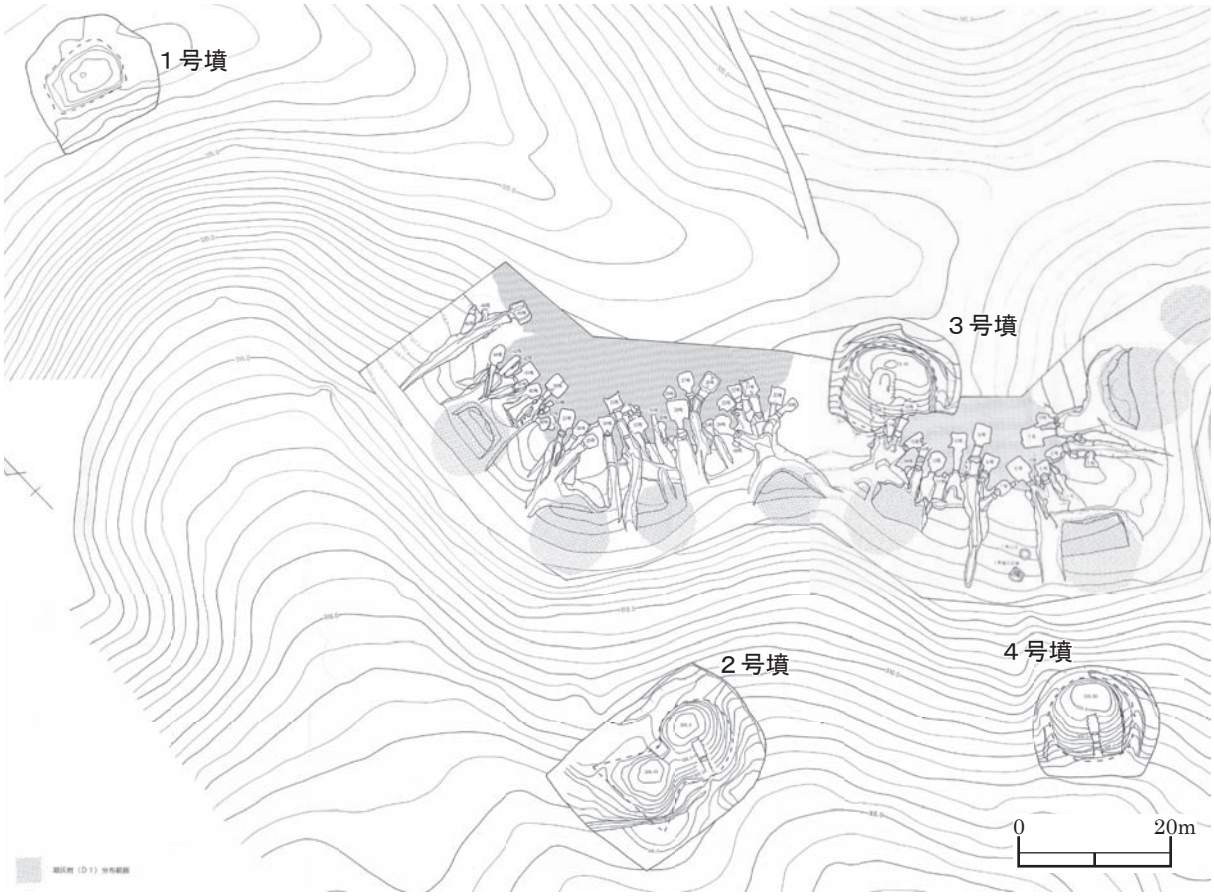
大仏横穴墓群は９基の古墳がある丘陵下部の東斜面に構築されている。横穴墓群は大きく２群に分かれ、北側が大仏横穴墓群Ｂ、南側が大仏横穴墓群Ａと呼称される。大仏横穴墓群Ａでは十数基ほどの横穴墓が開口しているが、未調査のため規模や時期などは明確ではない。



第３図　大仏横穴墓群と大仏古墳群

大仏横穴墓群Ｂも調査が行われていないため、正確な基数や時期などは明らかではないが、その前面に２基の前方後円墳が存在していた。

大仏横穴墓群Ａと、その上部にある帆立貝形古墳との前後関係は不明で、大仏横穴墓群Ｂと大仏15号墳・塚畑古墳との前後関係も現時点では断定できない。



第４図　笊内古墳群で見つかった横穴墓と古墳

②笊内古墳群

白河市笊内古墳群は、白河市の東部、阿武隈川から１㎞程離れた丘陵上に立地していた。横穴基54基、前方後円墳１基を含む古墳４基、箱形石棺１基が見つかっている（高橋ほか1996）。これらの古墳や横穴墓は圃場整備の一連の事業の中で消滅していて、丘陵自体も削平されている。

古墳は２・４号墳が丘陵の裾付近、３号墳が尾根上に位置し、１号墳は丘陵の頂上に築造されている。このうち、２号墳が前方後円墳で、３・４号墳は円墳である。２～４号墳の３基では横穴式石室が見つかっているが、その副葬品としては、２号墳から須恵器の短頸壺・甕・銅釧、４号墳から刀子が出土している。出土遺物が少ないため、それぞれの古墳の正確な年代的位置づけは難しいが、２号墳が横穴式石室を持つ前方後円墳であることなどから、ＴＫ209型式期の築造と推定される。４号墳は石室の特徴から２号墳に後続する可能性が高い。３号墳については石室の残存状況が悪く判断できない。

また、１号墳では埋葬施設は確認されていないが、盛土が確認されていることから人為的なものと見られている。

一方、横穴墓からは玄室内や前庭部から多くの遺物が出土している。副葬品では、玉類や耳環などの装身具類、鉄鏃や大刀などの武器類など豊富な副葬品が見つかった。中には、23・26号横穴の銀装の金具を用いた大刀、37号横穴の棘葉形鏡板付轡・棘葉形杏葉・雲珠などの金銅装の馬具のセット、銅碗といった貴重なものも含まれている。鏡板や杏葉はＴＫ217型式期の心葉形鏡板・杏葉と意匠の共通性が指摘されている（桃崎2002）。横穴墓から出土した遺物は７世紀初頭～前半代の時期のものが最も古く、横穴墓の造営開始は２号墳と同時期の可能性もある。

笊内古墳群には、横穴墓と古墳の位置関係が非常に近接しているという特徴がある。３号墳直下には、16～18号横穴という３基の横穴墓が掘削されていて、それ以外の横穴墓も非常に近接して掘削されている。特に、18号横穴は、３号墳の埋葬施設の構築範囲の直下にまで掘削が及び、特徴的である。

５　浜通りの事例

浜通り地方では、福島県内で最も多くの横穴墓が見つかっている。横穴墓と古墳が近接している事例は現状では最も多く、５つの事例が確認できた。

①高松古墳群と高松横穴墓群

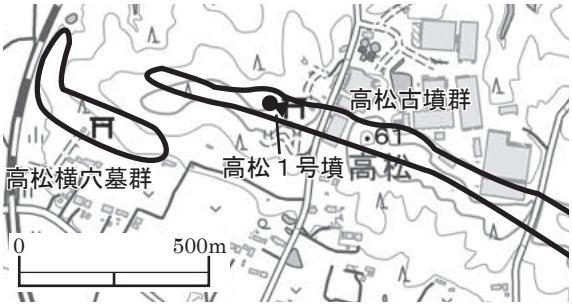
相馬市高松古墳群は、相馬市街地の中心部から約２㎞南側に広がる高松山と呼ばれる丘陵に広がっている。高松古墳群の古墳の正確な基数は不明だが、いくつかの古墳が盗掘を受けており、遺物が出土しているとされる。

この中に前方後円墳である高松１号墳がある（福島県立相馬高等学校1951、相馬市史編さん委員会2015）。全長21.5ｍと小規模なものだが、明治期に歩揺付飾金具・鈴などの馬具、銅釧や錫釧、玉類等が見つかった他、昭和25年の調査では大刀、鉄鏃、小札、銅碗、馬鈴といった豊富な副葬品が見つかった他、土師器・須恵器・人物埴輪などが出土している。

後円部ではＬ字形の横穴式石室が確認されていて、古墳の築造時期は６世紀後半と考えられる。現状では、高松丘陵のさらに南を流れる日下石川以北では、高松1号墳のほかの有力な後期の前方後円墳は見つかっていないため、副葬品から見ても有力古墳という可能性がある。

高松横穴墓群は、この丘陵の西端部に構築されている（相馬市史編さん委員会2015）。調査がされておらず、正確な横穴墓の基数や時期などは明らかではない。現状でも開口している横穴墓があるほか、明治13年に常磐線敷設工事の際に丘陵が切り崩され、何基かの横穴墓が見つかっている。玉類や刀剣類など出土しているようだが、それらの資料の詳細は不明である。

高松横穴墓群の調査が行われていないため、高松古墳群と高松横穴墓群の形成開始はどちらが早いの



第５図　高松横穴墓群と高松１号墳

かは確定できない。

②北山古墳群と北山横穴墓群

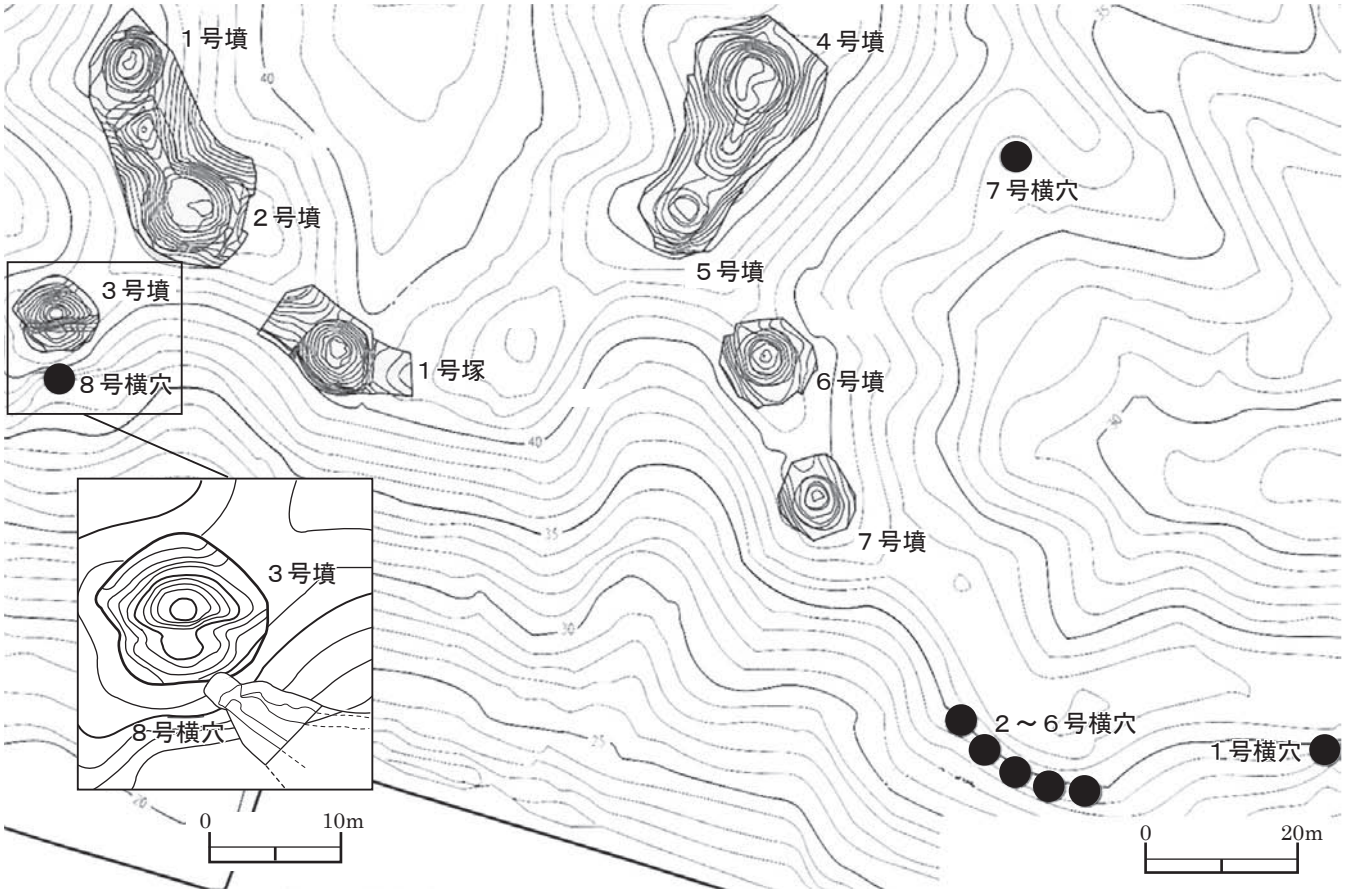
南相馬市北山古墳群は、新田川の北岸、南相馬市原町区の市街地から２㎞程北東に離れた丘陵で見つかった。丘陵上部では、７基の古墳と１基の塚状遺構が確認されている(堀ほか2002、斎藤ほか2003)。このうちの２･４号墳が前方後円墳であり、２号墳が全長23ｍ、４号墳が全長21ｍとほぼ同規模のものである。新田川流域では、北山２・４号墳よりも規模の大きな古墳は、前期の前方後方墳である桜井古墳しか確認されていない。２基は主軸方向が異なり、異なる尾根筋に築造されている１～３号墳、４～７号墳というように、それぞれの尾根で前方後円墳を中心に古墳が築造されていったと考えらている。

１～３号墳は確認調査が行われており、１・３号墳は礫槨状の埋葬施設が想定されている。２号墳は埋葬施設は確認されていないが、６世紀前半の土師器が出土している。１・３号古墳も６世紀前半に近い時期が想定されている。４～７号墳は測量調査以外行われていないが、１～３号墳と大きく変わらない時期の古墳である可能性が高い。

北山横穴墓群は、北山古墳群に隣接している(二本松2003)。８基の横穴墓が確認されていて、いずれも発掘調査が行われている。横穴墓の立地は分かれており、１・７・８号横穴は単独で、２～６号はまとまって立地する。また、１～７号横穴墓は南～南西方向に開口しているが、８号横穴墓は南東方向に開口しているという違いも見られる。

これらの横穴墓からは土師器・須恵器、石製紡錘車が出土している。４号横穴墓から出土した須恵器の提瓶は７世紀前半ものとされる。調査ではこれよりも古い時期の遺物は出土していないことから、横穴墓の形成開始時期は７世紀前半と見ることができる。

横穴墓と前方後円墳の位置関係を見た場合、１～７号横穴墓は４～７号墳に近く、８号横穴墓は１～３号古墳に近い。さらに７号横穴墓が単独で立地することを踏まえると、３つのグループに分けることができる。注意しておきたいのは、８号横穴墓と古墳との距離である。1～７号横穴墓は、古墳との一定の距離を取った位置に構築されているのに対し、



第６図　北山横穴墓群と北山古墳群

８号横穴墓の構築位置は３号墳と非常に近い。３号墳は、８号横穴墓に先行して存在していた可能性が高いため、８号横穴墓は３号墳に近い場所に意図的に構築された可能性がある。また、１号塚状遺構は埋葬施設が確認できないことから古墳ではないと判断されている。

北山古墳群・北山横穴墓群においては、古墳の築造が先行して行われていたと理解できる。

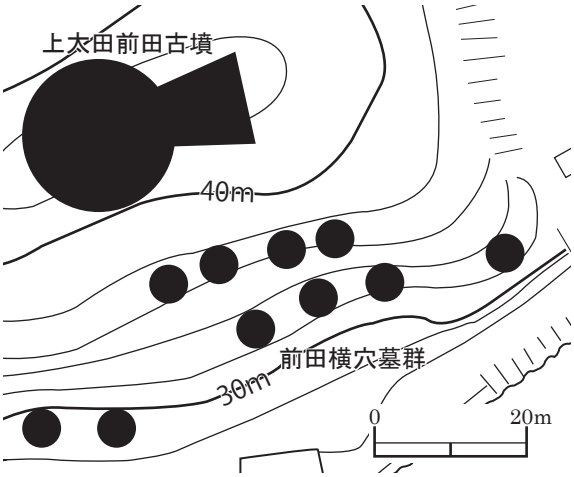
③上太田前田古墳と前田横穴墓群

南相馬市上太田前田古墳は、南相馬市原町区の中心部から４㎞ほど南を流れる、太田川北岸の丘陵上で確認された。規模は全長31ｍと小規模だが、太田川流域ではこの他に与太郎内古墳群で前方後円墳が確認されているだけで、規模もそれに次ぐ。発掘調査は行われておらず時期は確定していないが、墳丘形態が浪江町堂ノ森古墳に類似していることから、中期古墳とも想定されている。

前方後円墳がある丘陵南側斜面には10基ほどの横穴墓が存在するとみられている（南相馬市2011）。いくつかが開口しており、ドーム型天井のものや家形の玄室を持つ横穴墓が確認されていて、家形のものは６世紀末から７世紀初頭頃のものと推定されている。

④堂ノ森古墳・狐塚古墳と岩穴前横穴群

浪江町では、請戸川の北岸の段丘上に古墳が点在している。堂ノ森古墳は全長51.1ｍの前方後円墳で（辻1987）、請戸川流域では最大規模の古墳である。時期は不明だが、墳形から中期古墳と想定されている。



第７図　前田横穴墓群と上太田前田古墳

さらに、堂ノ森古墳から東に600ｍほど離れた場所には狐塚古墳が存在する。狐塚古墳は測量調査により、全長約46ｍの前方後円墳と判明している（辻1987、辻ほか2012）。堂ノ森古墳に次ぐ規模で中期古墳であると想定されているが、墳丘形態が堂ノ森古墳よりもやや古相を示すことから前期にまで遡る可能性も指摘されている（辻ほか2012）。堂ノ森古墳・狐塚古墳は、どちらも請戸川流域では最大規模の前方後円墳で、有力古墳である可能性が高い。

また、堂ノ森古墳と狐塚古墳の間には安養院古墳群が存在している。これまで測量や発掘調査が行われていないため詳細は不明である。

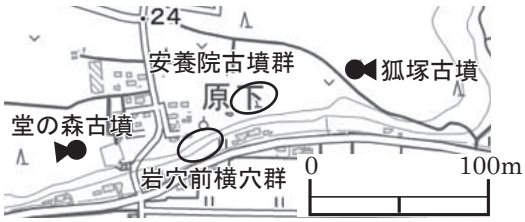
堂ノ森古墳から東に300ｍほど離れた段丘下部の斜面では、岩穴前横穴群が確認されている。現状で５基ほどの横穴墓が確認されているが、調査が行われておらず、正確な基数や時期は判明していない（浪江町史編纂委員会1974）。

古墳・横穴墓共に時期が未確定のため、前後関係は現時点では確定できない。

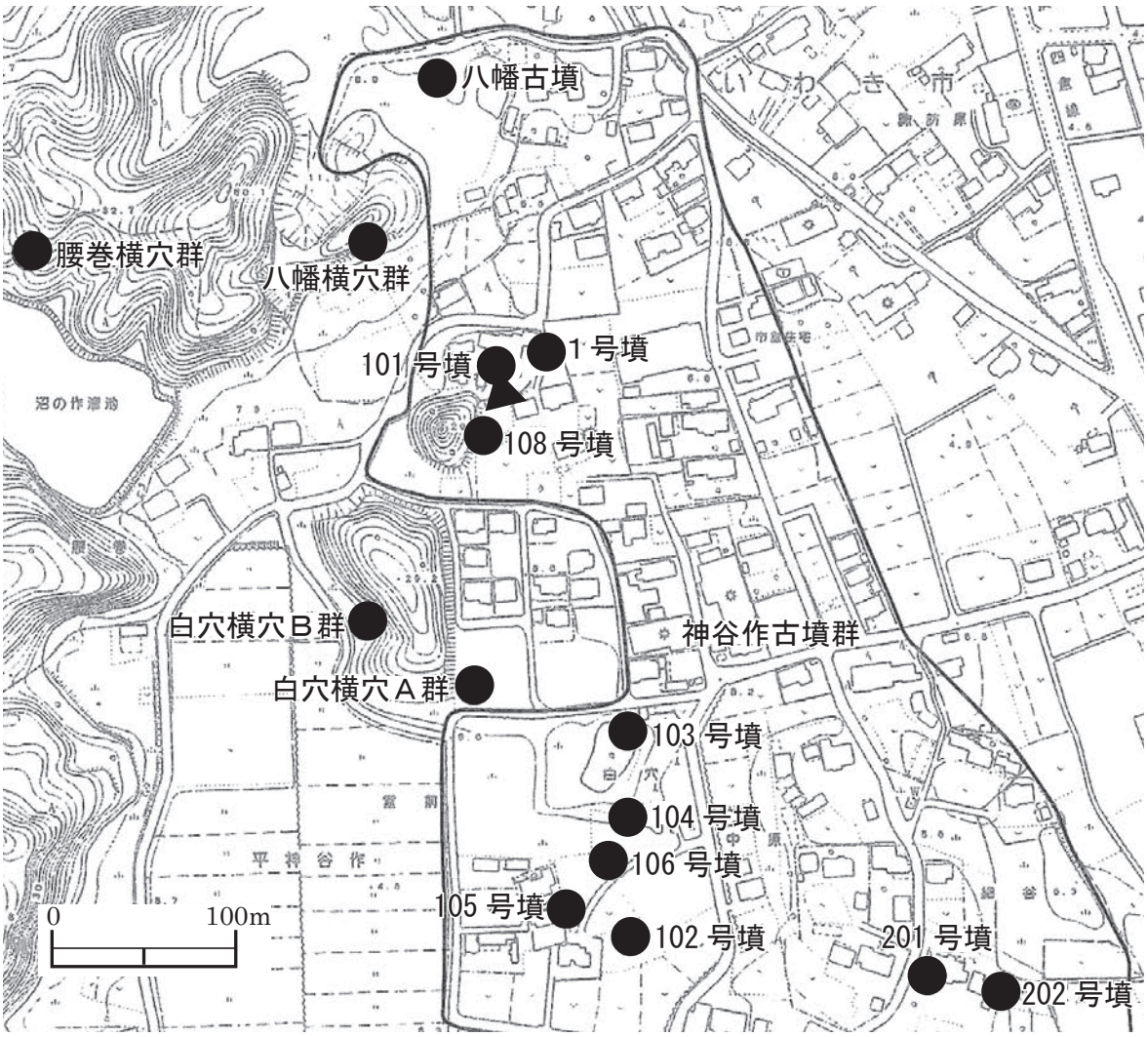
⑤いわき市八幡横穴群・白穴横穴群と神谷作古墳群

神谷作古墳群は、いわき市の市街地から南東に約７㎞程離れた場所に立地する。11基の古墳が確認されていて、101・106号墳からは多くの埴輪が出土している。このうちの101号墳は、全長約41ｍと推定される前方後円墳で、神谷作古墳群の中でも中心的な古墳と考えられている（磐城高等学校1949、木幡ほか2017）。

墳丘は後円部が大きく削平されていて、埋葬施設は確認されていない。この101号墳からは、昭和23年と平成26・27年度の二度にわたる調査により、天冠埴輪とも呼ばれる男子胡坐像や女子像、馬形埴輪、家形埴輪等が出土し、６世紀後半のものと考えられている。また、出土した土師器の杯も栗囲式の古い段階に位置づけられ、埴輪の年代とも違いは見られない。



第８図　岩穴前横穴墓群と周辺の古墳



第９図　神谷作古墳群と周辺の横穴墓群

神谷作古墳群の西側の丘陵では、複数の横穴墓群が見つかっている。八幡横穴群は、30基の横穴墓が発掘調査により確認されている（松本ほか2011）。

出土した遺物の中から特徴的なものだけを見ても、十文字楕円形または十文字心葉形鏡板、辻金具などの金銅装の馬具、金銅製パルメット唐草文透彫金具、小札・甲、双龍環頭大刀の把金具と鞘金具、馬鐸というように、豊富な遺物が出土している。

八幡23号横穴からはＴＫ43型式期以降のものとみられる鉄鏃が出土していて、八幡横穴墓群で出土している遺物の中でも古い要素を持つ。このことから、八幡横穴墓群はＴＫ43型式期以降に築造が開始されたと推定される。

また、八幡横穴群から南に約２㎞の丘陵には、白穴横穴群がある。白穴横穴群は丘陵の南端にあるＡ群と、丘陵西部にあるＢ群があり、このうちのＡ群の発掘調査が実施されている（高島ほか2010）。

白穴横穴Ａ群では、21基の横穴墓が確認されていて、東方向に開口する東群６基と、南東方向に開口する南群15基とに分かれている。東１号横穴からは双龍環頭大刀が出土し、その年代については６世紀第Ⅳ四半期と位置付けられている（豊島2017）。これよりも古い時期の遺物は見つかっていないことから白穴横穴群Ａの築造開始時期はＴＫ209型式期前後と理解できる。

白穴横穴群については、神谷作101号墳よりも先行する時期の遺物が出土しておらず、後続して造営された横穴墓群と言える。一方で、八幡横穴群の造営開始時期と神谷作101号墳の築造時期は、どちらもＴＫ43型式期以降に位置づけられるが、直接比較できる遺物がないため、どちらが先行したのかは断定できない。

6　前方後円墳と横穴墓の前後関係

以上のように、福島県の横穴墓と前方後円墳が近接している事例をまとめてみた。

前方後円墳と横穴墓の構築時期の前後関係がはっきりとした事例は少ない。

笊内古墳群では、前方後円墳の時期と横穴墓の造営開始の時期がほぼ同時期と見られる。一方で、横穴墓よりも前方後円墳の築造時期が先行すると言える例は、会津大塚山古墳と大塚山横穴墓、北山古墳群・北山横穴墓群、神谷作古墳群と白穴横穴墓群の事例である。神谷作古墳群と白穴横穴墓群は近接しているが、ほかの２例では築造時期に差がみられる。

ほかの事例は前方後円墳または横穴墓の築造開始時期が限定できていない。前期または中期と推定されている前方後円墳を含んではいるが、発掘調査が行われていないため、判断は保留したい。

時期が判明していない事例では、高松古墳群のような後期後半の前方後円墳と横穴墓が近接する事例の前後関係については、特に判断が難しい。

まず、福島県における横穴墓の出現時期は６世紀後半で、６世紀末以降に急激に数を増加させると指摘されている（菊池1993）。前方後円墳が築造されなくなる年代を見てみると、福島県を含む関東地方以北の地域では、おおよそＴＫ209型式期を最後に前方後円墳の築造が終了することが知られている。横穴墓の築造が盛行する時期とほぼ同時期に前方後円墳の築造が終了することになる。

そのため、高松古墳群・高松横穴墓などの事例では、今後の調査・研究の進展を踏まえた判断が必要になる。

7　予察

今回は事例の集成が中心で、具体的な分析は行えなかったが、前方後円墳と横穴墓が近接する事例について、具体的な背景が想定可能なのか、予察を加えてみたい。

今回取り上げたのは、前方後円墳と横穴墓が近接した事例だが、古墳同士が近接する事例がどう理解されているのかは、古墳と横穴墓との関係を考える上でも参考になる。そこで、古墳が近接して存在する事例について、先行研究の事例を確認する。

また、福島県内の事例で時期が判明しているものの内、前方後円墳の築造時期が前期や中期である場合には、その古墳と横穴墓に何らかの関連を見ることができるのかは問題となる。このような事例を考えるための視点も合わせて確認していく。

古墳同士が近接している事例としては、群集墳が代表的な事例と言える。群集墳の在り方の背景の一つとしては、「墓の累積的な近接造営」を通した「同族関係の確認の場」としての位置づけが想定されている（水野1992）。

群集墳はその内部に横穴式石室を持つ古墳が密集して形成されたもので、この横穴式石室と横穴墓は、どちらも横穴系埋葬施設とされるものである。群集墳と、横穴墓の違いは、盛土による墳丘の有無という点や副葬品の量の多寡などがあるが、どちらも追葬を簡単に行うことができる墓制という点は共通する。墳墓が一か所に集中して造営されることも、高塚古墳で構成される群集墳と同様で、横穴墓を群集墳の一形態として分析する場合も多い（広瀬1978、水野1992など）。群集墳と横穴墓は、その被葬者の階層などの違いも指摘されているが、共通する点も見ることができる。

次に、古墳同士が近接する事例の中で、前方後円墳と中小規模の古墳が近接する事例がどう理解されているか見てみたい。

首長墓とみられる前方後円墳の周囲に、それに後続する小規模古墳が次々に築造される事例について、前方後円墳に後続する古墳を造営した集団が、前方後円墳を始祖墓とみなし、その被葬者との擬制的な同祖同族関係を形成したものという解釈が示されている（土生田2010）。

その中では、前方後円墳の周囲に築造される中小規模古墳の築造時期が、前方後円墳の築造時期とは異なる事例も取り上げられている。その中では、東北地方における時期差が見られる事例として、山形県米沢市戸塚山古墳群に触れられている。

戸塚山の山頂には前方後円墳である139号墳があり、発掘調査の結果等から５世紀後半の年代が推定されている（加藤ほか1983）。この戸塚山の麓には多数の横穴式石室を持つ古墳が分布する。置賜地方では、この戸塚山周辺に横穴式石室を持つ古墳が特に集中している。

米沢市が所在する山形県置賜地方の横穴式石室の出現については、６世紀後半に遡るという説と７世紀中葉とする説に見解が分かれているが、どちらの場合でも前方後円墳の築造時期とは１世紀以上離れている。時期が離れている場合であっても、群集墳の築造場所を意図的に前方後円墳の近くとすることがあったと理解されている。

このような、より古い時期の墳墓に近接して新しい墓を築く行為は、古墳同士の関係以外でも確認されている。茨城県つくば市平沢３号墳は、７世紀前半頃の築造と見られ、その横穴式石室の前庭部からは８世紀前葉の骨蔵器が見つかっている。この骨蔵器の埋納位置からは古墳の被葬者との関係を強く意識したことが伺われ、古墳の被葬者との系譜関係を示すために前庭部に埋納されたものと指摘されている（田中・吉澤2011）。

特定の墓との関係を示すために、先行する墓に接して新たに墓を築く行為が、古墳や横穴墓よりも新しい、異なる墓制である火葬墓でも確認されていることになる。古墳時代から奈良時代の初めまでの時期を通して、墓と墓とを近接させて築く行為が一定程度行われていることが理解できる。

これらのことを踏まえて前方後円墳と横穴墓についてみてみたい。古墳と古墳あるいは古墳と火葬墓との間でみられた関係性を、古墳と横穴墓の関係に当てはめて理解することは可能だと考えている。前方後円墳と横穴墓が近接する事例の全てが意図的なものとは限らないが、その可能性意図がある場合には、先行研究で指摘されているように、前方後円墳の被葬者と横穴墓の造営集団との関係を示すことが一つの目的と考えられる。

では、改めて福島県の事例を見ると、会津大塚山古墳と大塚山横穴墓の築造時期は２世紀ほど離れている。北山古墳群・北山横穴墓群でも、１世紀程度築造時期に差が見られる。横穴墓を群集墳の一形態としてみた場合には、戸塚山古墳群と同じように意図的に横穴墓を近接させて築造したとみることはできる。ただ、時期が離れている前方後円墳と横穴墓が近接することについては、前方後円墳と群集墳の場合と同じように理解できるのかは検討が必要だろう。横穴墓は構築できる場所が古墳に比べ限られている。そのため、掘削可能な土地として選んだ場所の近くに、偶然前方後円墳が存在していた可能性は否定できない。古墳や横穴墓の分布・立地の特徴、集落域との関係など、異なる視点での分析を踏まえた分析をすることが一つの課題である。

また、福島県内では前方後円墳と横穴墓の前後関係を明確にできる事例が少なかったため、ほかの地域にも目を広げて、時期が判別できる事例を蓄積していくことをもう一つの課題としたい。

８　後背施設の事例

ここまでは、前方後円墳と横穴墓が近接している事例を見てきたが、その中には後背施設と指摘されている墳丘が確認された横穴墓群が含まれている。最後に、その例についても触れておきたい。

今回取り上げた横穴墓群の中では、既に、笊内古墳群１号墳は、埋葬施設が確認されないこと、横穴墓から離れて単独で立地していることなどから、後背施設と考えられている（横須賀2000）。

他の事例を見ていくと、北山古墳群の１号塚状遺構は、埋葬施設が見られないこと、横穴墓に近接して存在することから、後背施設の可能性もある。須賀川市大仏横穴墓群Ａの上方にある大仏１号墳は確認調査で埋葬施設の痕跡は確認されず、墳丘の規模も弘法山１号墳とさほど変わりないものであること、丘陵上に立地していることなどから後背施設の可能性がある。ただ、大仏１号墳は一部の確認調査が行われただけであり、盗掘された痕跡もあるため、盗掘により埋葬施設が破壊された可能性もあることから確定的ではない。この２つの事例は、他の古墳が近接して存在していることから、横穴墓ではなく古墳群に伴う可能性もあり、検討の余地がある。

このほか、浪江町大平山Ａ横穴墓群の１号墳も調査範囲内では埋葬施設は確認されていないこと、丘陵上に位置することなどから後背施設の可能性を検討すべきだろう（竹田ほか2017）。墳丘からは須恵器の短頸壷と見られる破片が出土しているが、詳細な時期は限定できない。周辺に古墳が存在しないことや尾根上に立地することなど、弘法山古墳などの後背施設と共通し、横穴墓と同時期に存在していた後背施設と想定される。

このような後背施設あるいはその可能性がある墳丘が見られる遺跡では、古墳の直下や墳丘裾に横穴

墓が築造されている事例を確認することができる。笊内古墳群では、尾根上にある３号墳直下に、16～18号横穴墓が立地している。また、北山古墳群・北山横穴墓群でも３号墳に接して８号横穴墓が掘削されている。

福島県内で確認できたのは今のところ２例のみだが、周辺に目を向けると類例が存在している。富津市向原古墳群と向原横穴墓群では、埋葬施設を持つ１号墳に接する位置に４・５号横穴墓が存在する（杉山ほか1981、野中ほか1980）。

向原古墳群・向原横穴墓群では、他にも注意しておきたい点がある。前方後円墳である２号墳の墳丘盛土内から埋葬施設が検出されず、その墳裾に接して１号横穴墓が確認されている。この２号墳と１号横穴墓の関係は、１号横穴墓が前方後円墳の主体部にあたる可能性が指摘されている（池上1999）。

このような墳丘を持つ横穴墓は、九州地方や山陰地方で多く確認されている。このうちの山陰地方では、時期が下るにつれて横穴墓自体の墳丘という性格のものから、次第に横穴墓の墳丘としての性格が薄れ、福島県で確認されている後背施設と同様の性格のものが見られるようになることが整理されている（横須賀2000）。

また、向原古墳群・向原横穴墓群で確認されている前方後円形の墳丘に横穴墓が伴う事例は、山陰地方を中心に分布していることが知られている（池上2000）。向原２号墳・1号横穴墓の事例は、福島県で確認されている後背施設は山陰地方との系譜関係が想定されているが、それと同じく山陰地方との系譜関係が想定される可能性がある。

北山古墳群で確認された１号塚状遺構については検討の余地があるが、笊内古墳群と向原古墳群・向原横穴墓群において、後背施設、墳丘を持つ横穴墓という同一地域に系譜を辿ることが可能な要素が見られることになる。これらの遺跡で埋葬施設を持つ古墳に接して横穴墓が築造されている事例が共通して見られることは興味深い。横穴墓と埋葬施設を持つ古墳が接する事例を蓄積し、後背墳丘などとの関連を検討する必要があると考えている。

9　おわりに

以上のように、横穴墓と前方後円墳の立地が近接した存在している福島県内の事例を整理した。今回は、前方後円墳との位置関係という視点から横穴墓造営の場所について整理した。時期の前後関係を明確にできる事例が少ないことから、確定的なことは言えず予察に留まった。

福島県における横穴墓は今回取り上げた以外にも多く存在している。横穴墓全体を見た時の分布や立地の特徴などを把握すること、横穴墓を造営した集団の集落域がどこなのかということなど、前方後円墳と横穴墓との関係を考えるためには前述した以外の様々な視点から分析を加えていく必要がある。

【引用文献】

会津大塚山古墳測量調査団 1989『会津大塚山古墳測量調査報告書』
会津若松史出版委員会編 1964『会津若松史』別巻１　会津大塚山古墳　会津若松市
会津若松史出版委員会 1967『会津若松史』第８巻　史料編Ⅰ　会津若松史
穴沢咏光 1976「喜多方市山崎横穴古墳群の出土遺物」『福島考古』第 17 号　福島県考古学会
阿部知己 1999「福島県埴輪カタログ　中通り編その一」『福島考古』第 40 号　福島県考古学会
池上悟 1990「日本の墳丘横穴墓」『日本の横穴墓』雄山閣
石田明夫 1999『会津若松市埋蔵文化財分布調査報告書』会津若松市文化財分布調査報告書第 62 号　会若松市教育委員会
伊藤玄三 1978「会津大塚山第２号墳の調査」『福島考古』第 19 号　福島県考古学会
大越道正ほか 2000『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告８』福島県文化財調査報告書第 369 集　福島県教育委員会・(財)福島県文化財センター・福島県土木部
加藤稔・亀田昊明・手塚孝 1983『戸塚山 137 号墳発掘調査報告書―戸塚山古墳群調査報告書第Ⅰ集―』米沢市教育委員会
菊地芳朗 1993「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館紀要』第７号　福島県立博物館
菊地芳朗 2005「前方後円墳と横穴墓」『季刊考古学』90　雄山閣
喜多方市史編纂委員会編 1995『喜多方市史』　第４巻　資料編１　考古・古代・中世　喜多方市
草野潤平 2015「横穴式石室から見た東北・関東地方の交流―阿武隈川流域を中心として―」『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』福島大学行政政策学類
小滝利意 1979『文化財調査報告第５集　大塚山横穴墓群』会津若松市教育委員会
木幡成雄・千田一志・山崎京美・矢島敬之 2017『神谷作古墳群』いわき市埋蔵文化財調査報告第 180 冊いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団
斎藤直之・荒淑人・藤木海 2003『原町市内遺跡発掘調査報告書８』原町市埋蔵文化財調査報告書第 32 集　原町市教育委員会
白河市 2001『白河市史』第四巻　資料編１　自然・考古　白河市
須賀川市 1974『須賀川市史』　第１巻　自然・原始・古代

須賀川市教育委員会 1974『県営浜田地区圃場整備事業地内埋蔵文化財発掘調査概報』
杉山林継・野中徹・平野雅之・笹生衛 1981『向原古墳群』富津市教育委員会
相馬市史編さん委員会 2015『相馬市史』4　資料編Ⅰ　原始・古代　相馬市
竹田裕子・山岸英夫・轡田克史・郷隆一・池田研・吉岡恭平 2017『大平山城跡・寺院跡　大平山A横穴墓群』浪江町文化財調査報告書第 20 集　浪江町教育委員会
田中裕・吉澤悟 2011「古墳の正面に納められ奈良時代の火葬墓―茨城県つくば市平沢３号墳出土骨臓器―」『筑波大学先史学・考古学研究』第 22 号　筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻
辻秀人 1987『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第 16 集　福島県立博物館
辻秀人・新沼裕伸・熱海泰輔・千葉優菜 2012「福島県浪江町狐塚古墳測量調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化 』48　東北学院大学
高島好一・馬目順一 2010『神谷作 106 号墳・白穴横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第 141 冊　いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団
高橋信一・中川光衛・木村亨 1996『母畑地区遺跡発掘調査報告 39』福島県文化財調査報告書第 328 集　福島県教育委員会
浪江町史編纂委員会 1974『浪江町史』浪江町教育委員会
二本松文雄 2003『北山横穴墓群発掘調査報告書』原町市埋蔵文化財調査報告書第 30 集　原町市教育委員会
野中徹・柴本一郎・平野雅之・岸本雅人・笹生衛 1980『向原横穴群』富津市教育委員会
土生田純之 2010「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』65　九州古文化研究会
広瀬和雄 1978「群集墳論序説」『古代研究』第 15 巻　元興寺文化財研究所考古学研究室
福島縣立磐城高等学校史学研究部 1949『福島縣高久古墳第一〇一號墳調査報告』
福島県立相馬高等学校郷土室 1951『福島県相馬郡八幡村高松古墳群 1 号墳調査報告書』
福島県立博物館 1994『会津大塚山古墳の時代』
福島雅儀 2019「東村（現白河市）笊内古墳群の様相」『北から見た倭国』雄山閣
堀耕平・二本松文雄・荒淑人・藤木海 2002『原町市内遺跡発掘調査報告書７』原町市埋蔵文化財調査報告書第 28 集　原町市教育委員会
水野敏則 1992「群集墳の一形態としての横穴墓」『古代』93　早稲田大学考古学会
山田　廣 1989『鹿屋敷遺跡発掘調査報告』浪江町教育委員会
横須賀倫達 2000「丘陵上の墳丘とその意義」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告８』福島県文化財調査報告書第 369 集　福島県教育委員会・（財）福島県文化財センター・福島県土木部
横須賀倫達 2011「山崎横穴古墳群出土小札甲の調査と研究」『福島県立博物館紀要』第 25 号　福島県立博物館
松本友之・和深俊夫 2011『八幡横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第 148 冊　いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団
桃崎祐輔 2002「笊内 37 号横穴出土馬具から復元される馬装について」『福島県文化財センター白河館研究紀要 2001』福島県文化財センター白河館
南相馬市教育委員会 2011『原町市史』第三巻　資料編Ⅰ　考古　南相馬市

【図版出典】

第１図　石田 1999・小滝 1979 を基に加筆・修正
第２図　国土地理院電子国土基本図標準地図を基に作成
第３図　国土地理院電子国土基本図標準地図を基に作成
第４図　高橋ほか 1996 に加筆
第５図　国土地理院電子国土基本図標準地図を基に作成
第６図　南相馬市 2011 に加筆
　　南相馬市 2011 と二本松 2003 を基に作成
第７図　南相馬市 2011 を基にトレース
第８図　国土地理院電子国土基本図標準地図を基に作成
第９図　木幡ほか 2017 に加筆